R7 楡木小学校　学校通信
No.３１
なりたい自分になる！
In 楡木サラダボウル
令和７年１２月５日
文責　余宮

12 月師走に入りました。令和 7 年も残りわずか。体調面に気を付けて、さらに深く学んでほしいですね。

フィルターバブルとエコチェンバー②

前回の続きです。5 年生の素晴らしい授業から端を発し、これからの探究活動の在り方を模索中。その過程で「フィルターバブル」と「エコチェンバー」という状態を検討しています。前回、「フィルターバブル」は、よほど“閉じた”環境で起こる特殊な状態では？と考察してみました。もちろん、情報があふれる現在であっても、多様な情報に目を向ける活動は不可欠だし、多角的に自ら情報を求めていくことは、楡木サラダボウルの大切な視点とも言えます。そうすると、「フィルターバブル」は解決できる、はず、かな？

問題は「エコチェンバー」らしい。

この「エコチェンバー」、私はおよそ同じ意味で捉えていました。どちらも、閉じた世界の中で閉じた心が盲信を過ぎる状態にしたものだと。が、どうやら、これは誤解です。

では「エコチェンバー」には、どんな意味があるのか。

「多様性の科学（ディスカバー21）」の著者として知られるマシュー・サイド氏は、「エコチェンバー」は、自分とは違う考えも積極的に学習する、と述べています。その上で、自分と違う考えを徹底的に否定し、自身の考えを確固たるものにしていくのです。

さらに、自分とは違うどんな考えも“間違った”考えだと信じているので、あらゆる説得にも応じない確固たる信念が作り上げられていきます。皮肉なことに、学習すればするほど、むしろ信念の殻は厚く、堅固なものに。これは、盲信を越えて狂信と言える状態だ、と。歴史的にも「エコチェンバー」に陥った難事件が、残念ながら少なからずありました。あらゆる戦争や紛争も、その一つと言ってもよいでしょう。

私自身にも、少なからず思い当たる節がある。残念ながら。

果たして「エコチェンバー」を解決する方法はあるのか。

マシュー・サイド氏は、全書の中で、議論ではなく信頼が不可欠と述べています。確かに、対立する状態での議論は、火に油を注ぐようなものです。根拠をもって理由付けしながら主張しても、逆サイドから見れば、それはフェイクニュースと主張できる。人の数だけ解釈された真実は、どれも正しいと言える。真実は、一つじゃあないんです。

だから、論理に先立つ信頼関係が、その主張を受け止める土壌になる、と。

確かに。

もちろん、論理を否定するつもりは毛頭ありません。むしろ、論理的に筋道立てて考え議論することは、多様な世界では不可欠。しかし、ヒューマンは「エコチェンバー」のような状態に陥りやすい生き物であることも確かです。その意味では、信頼はこの世界の理（ことわり）を探究する上で、大変重要な意味を持つでしょう。

ここまで考察を進めていく中で、改めて、5 年生の探究活動の柔らかさがものすごく素敵なことだと思うのです。互いに認め合う信頼関係がある＝多様な考えをもつ確かな信頼のある仲間がいるからこそ、互いの意見を素直に受け止められる。自分にはなかった考えにも開かれる。本来の洞察が働き、豊かで革新的な主張へと昇華されていく。

本校５年生の学ぶ様子に、シン探究人たる姿を見出すことができますね。